地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018. 9

平成30年9月1日発行（毎月1回1日発行）第66巻第9号　No.724

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一八年九月号（通巻七二四号）

◇今月の二十首詠……残日抄　北山雪男　2

■作品A
A　八乙女由朗・山下雅子他　4
A　八橋千代子他　20
B　山田珠美他　50
C　吉池ケサヨ他　66
A　須川千恵香他　82

■オリーブ集　仲西正子・中村はるみ他　42

◇今月の二人　赤堀敦子・定金崇恵　16

私と短歌との出会い（193）　内田泰子　19

◇秋のアンソロジー〈実〉　福田廣子　38

■「地中海」以前の香川進　久我田鶴子　40

■歌壇月旦——歌集というもの　檜垣美保子　65

◇シルクロード・カフェ——（責任編集）木村文子　48

■七月号作品批評
A……近藤芳仙・篠原まり子
田中富子・金近敦子
B……横田敏子・高津砂千子
C……柴田登志恵・中島彰代
オリーブ集…松浦禎子・坂上直美　72

今月の二人・作品評　久我田鶴子　18

最近の歌誌より——〔編集部〕　71

◆第一歌集の頃　田土才恵　98

支社・グループ掲示板（新樹の会）　藤田美智子　98

古典基礎語、その他。　99

クリップ……　100

神田通信……　表3

（表紙デザイン）Tazuko Kuga

残日抄

北山　雪男

昭和二十二年生まれ。
伊豆支社所属。

作、演出、主演、観客すべて俺　狂ひのたうつ真昼の夢に
再生のその名北山雪男とは言ふもののこの腰折れは

*

あぢさゐは雨のち曇り　蝸牛じわりじんわり日暮れに向かふ
二層式洗濯機偏愛、ネット拒否　残愁ふたり昭和の家族

＊娘の住所は京都室町三条下ル

就職は氷河期世代の娘にて〈後の祭りの町〉に耐へゐる
凌霄花　炎暑の街にアルコール流せぬ喉がひりひり痛い
蝉の声聞かず晩夏(おそなつ)過ぎにけり　父の手招きまだまだ見えぬ
病名を付けて病気にして貰ふ為にあらねど病院へ行く
ネクタイを結ぶ暮らしは夢の如(ごと)箪笥に眠る黒の一本
身廻りの始末おほむねガラクタの始末にてあり古傷含め

髭そりの剃り残したる実存が頬杖つけば自己主張する
漠然と立ち去るもよし夕暮れの路上横切る鳥影の如
失楽の風追ふ如く旅立ちぬ秋の扉を後ろ手に閉め
酒呑みの列よりあはれ零れ落ち車窓に呷るペットボトル茶
仰ぎ見る雲あらざれば臆病な自我が俯く坂の中程
胃下垂のやうな形の沼に来てある夜ぼそぼそ愚痴こぼしをり
木枯しの朝です頭が寒いです老いのめぐりは日毎さびしく
年の夜や畳に座る民族のジーンズの膝抜けてくつろぐ
雪に紛れ舞ふひとひらの蝶のあり少年の日の孤独呼び寄せ
定住地少なき俺に皮肉にも生まれは唱歌「故郷」の町
負け犬の血筋この世にあるらしく夜な夜な夢に放つ遠吠え
雪の野に生きそこなひが横たはり過去となる星待ちわびてゐる
雪解けの街に目覚めたり逆縁を果たし得ずして馬齢重ねて
胃に風吹き〈残酷極まりなき月〉と聞きし四月がじわり近づく

作品A

八乙女由朗　戻りゆく　・柴

八月は一番重き月にして盆も終戦も一緒に来るなり
屋根葺きを手職となしし農家ひとら語りつつ行けり寺のうしろ道
東北本線の車窓に見えくる竹藪はわが生まれたる寺にてありき
「汽車通」はわれらの語なり四十年運ばれ乗りし思いが湧き来
阿武急は乗りの思いを果たしたる山本友一が通りし線路
振り向けば戦後生まれのアプレ・ゲール白髪にまみれて追い越さんとす
暑気避けてわが家に上りし蛇の子が急ぎ帰りゆく庭の茂みに

山下雅子　風　・習

ためらえど言わねばならぬことのありTシャツ揺らす風を見ており
ベランダのジーパン吹かるるままおどるわれを離れてこのしなやかさ
赤シャツの七十歳の男という尋ね人の声近づく夕べ
リハビリの片足立ちは易からずすんなりと立つフラミンゴの群れ
やあと去るバイクの人に立ち尽くすあのリハビリ士と気付くに間あり
秀樹逝けりわが老春に熱き立つ「YMCA」ありがとう
くつろぎて眺めて読みてうとうとと鈍行電車に運ばれてゆく

横田敏子　風　・福

戸を繰ればさっと入りくる朝の風思わず鼻がひくひく動く
日記帳一冊ゴミに紛れさせ今朝もわたしの過去を捨て来ぬ
風通るたびに木洩れ日揺れており鎮めし心また揺れはじむ
あっ風が見えるよ　早苗光らせて一直線に走って行くよ
公園の脇通るたび思いおり土に還れぬ土が眠れる
五月より咲きて最後のアマリリス癒されし日々水無月終わる
あじさいの白の際立つ夕つ方もう戻れないわたしの時間

吉内尚彦　早苗田　・浜

薔薇を愛で垣根に語りし友は亡し今年も花は咲き香りおり
川の上に一千匹の鯉のぼり五月を吸い込む大きなる口
水張田が一日にして早苗田に機械の力は魔法の如し
ぼうたんの終り芍薬ちらほらと古刹しずもり夏の訪
紫陽花の色増す梅雨の花の上青蛙たち嬉々と遊べり
ローソンの裏の軒端につばくろは巣作りをせり余念もあらず
早苗田の上を飛び交うつばくろは雨にも負けず風にも負けず

吉永惟昭　うから　・熊

姉白寿兄九十六次姉卒寿末弟われも米寿迎うる
四人足し三百七十三歳に天寿百二の母としょんしょん
「肚黒くないから老斑でません」と呵々大笑の母思ほゆる
耳遠き長姉は言いたきこと言いて電話切るなり「ハイお元気で」
合唱コン・エピソード募るテレビにて冬景色唄う兄と会いたり
はやばやと施設暮しの次姉よちよち医師免許証持つだけの女に
星占い験担がねど健康の運勢だけは　牡牛座の妻

朝井恭子　紫陽花　・森

紫陽花の紫色の花にふるしとしと雨も淡き色帯ぶ
風邪に臥す春の日長し友よりのフリージアの花ゆたかに香る
あじさいの花毬風にさゆらぐを窓辺に見つつ風邪に籠れり
白粥をティー・スプーンに掬い食む体温計を身より離して
発熱に籠りいる日を窓鳴らし風は問いゆく「大丈夫?」
心身のおとろえ嘆く閑もなし今日も朝から失せ物さがし
八十路越え母の歳こえ生きており　かあさんもすこしがんばれそうです

磯田ひさ子　増子さん　・森

山津波　オウムの処刑　君の逝去　思ひもよらぬことにはあらず
足利の大ふぢの花を見にゆきしこの世の浄土と君は言ひたり
君の死を心にたたみ街ゆけば風になりしかわれを押しくる
ふりむけば街の騒ぎの中に消ゆ友よ哀しよ　だるまさんがころんだ
見えかくれしつつこの世を離るるや蓮のうてなに何か乗りゐる
空色の帽子に水玉のブラウスの増子さんの遺影ほほゑむ
嫁がずに逝きたる君のうらやましその父母の墓に納まる

市原志郎　日常　・萬

「なぐさめです」と言いつつ小犬一匹を我のベッドに置きて行く孫
干涸びて憐れや夕化粧の小さき花揺れいる夕べ台風が来た
夜遅く帰り来たるかことことと二階に音す日の替わる頃
烏一羽塀の上を歩いている我もこのように歩いて見たし
サクランボ置かれし左手に夏の盛りが過ぎて行くなり
誰彼の顔思いつつ一日中大雨洪水注意報聞く
妻は用事で買い物に出ている転ばないようゆっくり歩くぞ

大浪美雪　若き龍　・森

しながどり安房の神神手荒なり暴風もちて迎えくれたり
大きさも形も違う千枚田目借時なるに蛙声はる
あげひばり何を告ぐるや前線の去りたる空にちょっとぴりりぃ
太き幹に潜みおりしか若き龍彫り出だされて宙をにらみぬ
榔の木のこぶこぶの幹右巻きに巻き昇りつつ天のまほらに
「春あさき」香川進の歌碑のわき紫深き小さきすみれの
風寒き誕生寺山門見上げたり白き雲ゆくそうそうとゆく

奥田清和　木石に似て　・大

自己主張ほどほどにして自粛せし先人の知恵要なきものか
散文か散文詩かは存ぜねど生きとし生くるもののため息
タオルにて一部をかくし悠悠と共用風呂を出でくる少女
演習を終へて小川に身をひたすわれら新兵木石に似て
極楽のめだかが空を飛ぶといふ夢などありや宇宙戦争
春の夜の夢のごとしとさとれるか首脳外交色即是空
娑羅の花咲きさかりゐしいく年や垣の白樫冴えざえと照る

奥田陽子　パズル　・羊

株価さえ下がらねば良きと誰が言いしにこれる雨に濡れて帰りぬ
福島はもはや遠きか答弁にパズルのような言葉並べて
ゆらゆらと青葉の光にひたりつつ放射線量聞きていたりぬ
〈夜の森〉の歌はおぼろとなりたれど思いを共に人ら集える
伝えまた児らにも伝えゆかんとぞことば沁みつつ青葉風来る
春秋の名は若桜また楓みちのくのみ寺に伝えて久し
何ものにも雪にも敗けぬ強さこそ掛け合い言葉はじけ響ける

小野雅子　ねぢ花　・羊

あの人も観てゐると思ひながら観るコロンビア戦ワールドカップ
ねぢ花の好きな彼女にねぢ花を摘む生協の車待つ間に
聖画と同じ色と形の装ひにガザの女の死を嘆きゐる
くすんだ赤、オフホワイトと黒の布何百年も女の纏ふ
新聞を読まないといふシングルマザー権利も資格も手よりこぼして
飯炊きを専門にする下女のゐた誰にも誇りのありたる時代
祖母に見せてあげたしと見る松平不昧の遺す茶器さまざまを

菊岡栄子　ショートステイ　・漣

ショートステイ二泊三泊の集まりに自己紹介からその日が始まる
週ごとにショートステイの施設変わり馴染めぬ空気に心重たし
週により三泊四日の日のありて居眠ることの多くなりたり
治療法の無きまま過ぐるひと日ひと日為す術もなき水無月の候
何ごとにも心動かず塞ぐばかり思い通りにならぬ悔しさ
差し上げし「墨田の花火」それぞれに花開くとう聞くも嬉しき
花持たぬ「お多福紫陽花」日陰にあり今年は咲かぬ楽しみうすく

菊地栄子　歩幅　・湾

鳥族に滅ぼされゆく豆族か発芽の頭喰われてあらぬ
みずみずし燕の背菜もソテーにす容易く痩せぬ思いかこちて
百グラムのおにぎりはやや小振りなり糖を控えん予防のはじめ
孫守りのストレス発散せんとする妹の誘い断りかねつ
しろじろとあかしあの花降りかかる七十路半ばの初夏の寂しさ
ふわふわと昨日も今日も落ち着かぬ何かが忘れ去られるようで
必ず、行きつくものとうたがわぬこの小さなる歩幅なれども

木村文子　皐月　・羊

谷の雪抱いて山はしまうまの背のように夕空に浮く
ビル群を渦巻く風に逆らわず都市のカモメは弧を描きゆく
大空を翔いつくす誇らしさ枝の先まで花は咲きおり
風に乗りここまで桜が花びらが我の額をかすめて舞いぬ
一日の無為の深さよさざ波のように灯りがともりゆく宵
八重桜重たき花は冷えてゆき闇が下から這い上がりくる
滑らかな床に転びしカメムシをティシュー二枚で生け捕りにする

草刈十郎　昭和の日　・世

安普請のわが家に吹き入る隙間風春風なれば心楽しき
いと小さき花を持ちたる野の菫花踏むまじくわれ歩むなり
人を惜しみ落花惜しみて老いわれは惜別の声きく風の中
子らつどひ喜々と遊べりこの子らの夢は何色樟若葉もゆ
見事にも辛夷は咲けど主なく痛み激しき空屋かなしも
平成もあとわづかにて平成を惜しむ昭和の日を迎ふるなり
加計森友公文書改ざん蝌蚪のごと混迷の度を深めゆくなり

國井節子　ブロック塀　・春

手術後のすつきりとせぬ両眼に園の紫陽花冴え冴えと見ゆ
老いたれど二十六本歯の残り固焼きせんべい噛む音たしか
近所よりみどり児の声泣きやまずわれの母性もひととき目醒む
地震には弱しと言はれて久しかりブロック塀が又も凶器に
この先は行方も知らぬ老の道ふいの地震に心も揺らぐ
たましひの不安を煽る余震予報　梅雨空の下両手あはせる
幸ひに地震の被害なければ深夜サッカーに心を紛らす

小泉泰清　意固地　・う

柊の棘の緑葉枝を張り梅雨の湿りに意固地に見ゆる
若きころ座禅の道に入りたり八十路こゆるも肚を見続く
脚を組み掌結び半眼に背筋伸ばして無字を追ひ行く
色即是室、空即是色と経をよみ心定めて清しくなりぬ
仏有り無しを超えたる心根が肚に落ち着きのびやかとなる
窓からの梅雨の晴れ間の爽やかな風の入りくる瞑想の間を
見聞きせしことを蓄へすごし来し蔑する勿れ老の振る舞ひ

河野繁子　人と獣　・雁

山近く過疎となる町季くれど今年の蛍多くは飛ばず
熊のいる放送ながれ木下闇波状飛行の烏一羽消ゆ
人と獣ともに住む町夏椿すがすが咲けど穏しくあらず
発砲音谷にとどろき昼り日の山を必死に逃げてゆく獣
里に下り人の作れる田や畑の実りはたやすき彼らの餌場
猿の被害かこつ媼ら商店に逢う人ごとの話題は豊富
めずらしく蛍出ぬ年「今晩は」窓にとまりて一つ灯ともす

小西美智子　蔦　・大

はなびらの重なりおもく首ほそきラナンキュラスはうつむきやすし
グループの沙羅の名前のなつかしく沙羅の花咲く道あゆみゆく
梅雨明けの雨戸あければ新しき今年竹一本ひかりていたり
のうぜんかずら朱く咲きいし伯父の家小さな水車が池に廻れる
手造りの小さな水車の廻りいし山蔭の家訪いし遠き日
さるすべり白く咲きいるマンションに人の出入りを見しこともなし
人逝きて空き家となれる白壁を蔦這いのぼる日ごとに高く

小林能子　愛ほしき　・羊

さても古き彩色写真の菖蒲園「ひばり御殿」の在りし辺りか
間坂(まさか)をくだり国道渡れば病院あり埋め立て前の渚のあたり
病室に娘の絶品さしいれは吸飲み・イヤホン・リハビリシューズ
見なれたる昼の景色に陽のあたる建屋と巨(おお)き「超低温」の文字
カーブして過ぎゆく電車の満員のその中に揉まれて居たはずのわれ
夢のごとき歌集上梓の相成れば日日薬(ひにちぐすり)もゆるやかに効く
とり戻せぬ時間もありて愛ほしきひとりの暮しうたの彩り

近藤栄昭　至仏山　・福

ほの霞む尾瀬の木道人の列〝夏の思い出〟たなびいている
腹太き布袋の山容至仏山森を抜ければまもなく臍よ
動き出せば止まらぬ習い山登りぽつぽつ降りぬ今日の序奏と
山の名の謂われ伝わる至仏山いただきの岩聖に見ゆる
雨けぶる山の頂群れる岩休むをためらい身体冷え来る
山の花を教えくれるも上の空筋のみ残る下りの肉は
雲の中雨降る中の五時間は現ならずや掌上の世か

近藤芳仙　大日堂　・信

あたらしき赤きあてこに並む地蔵なだりの畑を背にほほゑめり
リュック背に古き石段のぼりゆく日向小泉とふ坂のつづきを
山腹の方形造りの大日堂　毘盧遮那仏の四方を照らせり
清水とふ歌友住まふはこの辺り坂道にそふ水音高き
水しぶき見えねど高き音たつる谷川の岸　桜咲きそむ
遠近の木立に葛屋の朽ちそめて陽の中をとぶ蝶の影ろふ
聞き及ぶしやうゆ久保橋つひになくこの時季川の流れをだゆむ

坂上直美　死の日まで　・天

死の日まで何処行くべき何すべき夢見るままに時は過ぎゆく
何すともなくて過ぎゆく老いの日々せめて一首の歌を作らん
温泉の老舗旅館の一部屋の姿見うっすら埃をかぶる
送らるる身とぞ信じて今を生くわが亡き後は再婚をせよ
古稀にして父となる人稀にあり願わくば君それを目指せよ
歌とうはわが蜘蛛の糸一筋の天より下る細きかがやき
死の日までわが脳髄に歌のあれ最後の息の三十一音

坂出裕子　梅　・洛

ひまあらば庭に出でをり草を抜き落葉を拾ひ時を忘るる
考ふることなくひたに草を刈り枝を伐りゐるときのしあはせ
歌を詠むいとまのあらず梅を漬けミニトマト採り時の過ぎゆく
梅の実は日ごとくれなゐまさりつつ採ってとつてと声に告げをり
指先に素直にもげてやはらかき梅の実ひとつてのひらに載す
うちの梅送ってと言ふ子のために今年も漬けむくれなゐの実を
どのやうに漬けたか思ひ出しながら重しをのする梅の朱実に

佐久間晟　日乗（一四）　・漓

この頃の心の焦りは何ならんもしや誰かが呼んでいるのかも
花などを美しと見る余裕などすでに失せてはただ過ごす日日
そしてまた最後の始末は清めんと机の掃除を始めしも、ああ
振り返る九十余年の生涯に残ししは何、雑紙の山のみ
それにしても心美しき仲間らに囲まれ生き来しわが幸せの過去
見た聞いた知ったの外の刺激は不要、わが歌はわれのこころの内に
名前など売れたとてそれは何になる己れひとりの満足に過ぎざらん

佐藤道子　暗雲　・甲

アベリアの香に癒さるる垣根道六甲山は暗雲深し
自然には無き鉄色の霧の中六甲山は暗く鎮もる
サッカーを話題にせぬは非国民いつか来た道戻りゆくらし
日本中サッカーに沸くその裏で国を滅ぼす法案定まる
梅雨空の彼方に見ゆる水浅黄ケムトレールの果ては青空
しめ飾り揺れて涼しき風が吹く梅雨の晴れ間の若宮八幡
山際の小さき祠の八幡宮ひっそり詣で平和を祈る

椎名恒治　富士　・橘

遠き遠き雲に富士は消えゆきて六月二十六日頭上に満月
屋上の空にいつまでも黒き翼乱れつつ塒を争ふらしき
移りてきて四ヶ月経たり六階に見下ろす校庭の青々と芝生
若き友の遺品なるサウスベリア伸びに伸びて葉は尖りたる
海の上に満天の星見つれども再びつひに仰ぐことなし
歳月はわれに九十五年つもれども一片の星の屑も残らぬ
連なれる高圧線の鉄塔の三段目あたりが富士の見ゆる位置

鈴木結志　米朝会談　・福

史上初米朝首脳会談に興味津津テレビ一色
米朝の首脳会談映画にはあらじ現実非核化望む
米朝のトップ会談切り札を出すにあらずや息ひそめ見る
トランプと握手正恩緊張か破顔一笑までに至らず
会談はなごやかにあれ侍の「武士の二忘」使わずに済め
話し合い朝鮮半島非核化に合意米朝サインに至る
指紋より身を明かさるる警戒か正恩米朝合意自がペン

世木田照比古　人体展　・茜

立ち並ぶこと多き街東京の博物館に二時間を待つ
十重二十重現代人の囲むなか江戸期の人体模型小さし
腸内は免疫細胞の訓練所人体展に見る造化の不思議
免疫細胞がガン食い泄すシミュレーションわが下腹部を押えて見入る
体内で五臓六腑が呼応するまこと見事な付度制度か
胸を張り大地踏みしめ歩み行く威厳にあらず転ばざるため
「香々」に会うか会わぬか悩みたり長蛇の列に圧倒されて

関根榮子　コンビニ　・埼

紫陽花のうなだれている昼下がり蝉も暑きか蝉の声なし
久々の雨音なればこの宵のテレビの音声低くして聞く
新しき家建ち並び行きつけの小さき店を探しあぐねつ
バイパスの走る崖上に残りいる鎌倉街道も夏草のなか
目印の中野サンプラザなくなるとう叔母の家探しし遠き日を恋う
開店のコンビニ賑わうエゴの花咲きいし林はこぞまでのこと
大雨のようやく小降りになりたればまずコンビニへ買物に行く

関根和美　身代わり　・埼

わが子の死見届けたりしそのひとの気丈さをいう聖母マリアの
強き母を語りいしひと一人娘の病い篤きを告げられたりし
病むことに苦しむことに意味あるをわかる身となしたまえと君は
身代わりに裂けよの願い届くなく娘の体にメス入りゆかん朝
ひとをかばい誰の身代わり幾たびも刺され逝きしをイエスに重ぬ
夏空を祈りののちに見上げたり如何なる啓示を今朝はたまうや
いつ如何に可視化されゆく存在か問わず七代信じいしこと

高尾恭子　梅雨　・大

タニウツギみだれ咲きたり六甲の山手あこがれは憬れのまま
オタクサと名づけられたり紫陽花の花むれ青く雨粒やどす
詰めこんだ昨日の塩鮭なま臭く冷蔵庫だけが音たてており
青カビの生えてきそうな繰り言を聞き流しつつ雨をみている
昼飲みのビールはエビス会うたびに母のからだが透明になる
愚痴愚痴といや佛佛とたらちねの母は方丈の極楽にいる
沖縄は梅雨明けとかや爪赤く染めて裸足のステップを踏む

高津砂千子　新緑　・風

桜水（さくらみず）　花水坂（はなみずさか）　はた笹谷とう駅名うつくし新緑のなか
温泉の暖簾かかりしローカル線ロングシートに人の少なし
芭蕉翁の像の出迎えくれし駅飯坂温泉坂多き町
「案内してあげたかったの」なつかしき第一声は病みあがりとう
ゆったりと露店風呂にて身をほぐす八時間なる汽車旅思い
みどり濃き渓流に出るあさまだき怖さもあれど石段下り継ぎ
われひとり乗せて発車すシャトルバス旅の終わりの朝ありがたし

高橋和代　大和言葉　・桃

入学し英語の授業たのしむも戦はじまり中止となりし
戦中は学生らしく無き日日も「挙国一致」の熱気にあふられ
敗戦にて英語は生徒それぞれが選びて受くる学科となりし
敵国の、まして負けたる無念さに進んで習ふ事はせざりし
その折の判断いまに仇となりローマ字さへもおぼつかなきよ
幾たびも習らはざりしを悔みつつ敢へてそのまま背を向けて来つ
「みそひともじ」に拘る日日に深みゆく「大和言葉」のそのゆかしさに

滝田靖子　事故　・新

えっと思ひあっと思ひし時はもうエアバッグふたつ開いてをりぬ
きな臭い匂ひただよふエアバッグ開いてしまひし運転席に
一時停止無視の車のぶつかりてわたしのアクア廃車となりぬ
イメージぢやないと言はれてる新しいわたしのアクアのダークネイビー
新しい車の運転にも慣れて整形外科の通院終はる
三十歳になりしばかりの看護師が終活始めましたと言へり
だっていつ死ぬかわからないぢやないですか事件も事故も突発的だし

竹下妙子　雨の花　・霧

淡青とくれなゐ色の紫陽花の玉並びゐて何を夢みる
しづかなる雨降り出でて止みし夜あぢさゐの花咲きてくれなゐ
硫黄山ふかく傷つけし土石流山嶺に向かふ道黒く冷ゆ
青空を遠景として垂るる藤　花淡ければしばしまどろむ
枇杷の実が夕日の中に輝けり野道を駆ける少女の髪の
さみだれに打たれて咲きしカサブランカ香り漂ふ独りの吾と
純白の十四の花の咲くからに雨に濡れつつにほふは愛し

田土成彦　月読　・宙

医王寺を訪ひしは二十年ばかり前記憶にあらぬ大樹を見上ぐ
三貴紳のひと柱でも彫うすき月読の杜は参らずに過ぐ
「六段」の弦がかすかな唸り持つ一瞬ならむ玉響とふは
カブトガニの眼球と言ふ突起物見てゐる空の青はいかほど
竜王を諫める人も無きままに五日五夜の雨の駄々漏り
パンにするかお粥にするか生くる世の尽きぬ迷ひのただ中に居り
雨音のしげき夜すがら捨て猫の鳴く声ほそるを聞きながしゐる

田土才惠　福島　・宙

山里の風輝ける福島の種まきうさぎわが目に追いぬ
聞きおよぶ阿武隈川の流れみゆ信夫山とう小高き丘に
長々と丘のなだりに覆われてフレコンバッグ残されしまま
柔らかき緑の里を走りきて薔薇の花咲く福島盆地に
避難者の住宅今は人気なし春のひかりのおだしき昼を
この町に避難せしひといま何処ひと住む気配あらぬプレハブ
浸りいる福島弁のたおやかさいつかこの身を包み込みおり

玉井綾子　電車景　・羊

電車待つ五分に食べる、メイクする　昭和生まれの越えぬハードル
通勤の車内にサロンパスの匂い　梅雨の鬱屈がときほぐされる
新聞と本とスマホと持ち歩き座れし車内に居眠りをする
母親の腕に己が腕からませて座席の少女は目を光らせる
共通のロゴを身に付けペアルックよりも近しきホームの二人
それぞれにバイオリンケース背負う母娘われから遠き道の一本
子の塾を意識した朝改札に貼られし広告シールが光る

虎谷信子　地震　・伴

どどんといふ大きな音で　地震おそふ。ただ茫然と　座りこみたり
震源地と　知りて殊更怖くなる。わが地に断層あるやも知れぬ
思ほえば　近き山辺に地震研究所。子供の頃よりありしを思はる
幼き生命　絶たれしことの哀しみよ。ブロック塀は　あまたに及ぶ
あちこちの友より　電話いただきぬ。久し振りなる会話もはづむ
地震カミナリ火事・オヤジ。まこと地震は　怖さ筆頭
幸ひに　余震次第にをさまりて、わが日常の　もどりきたれる

中島央子　ひるがほ　・森

なが病みの友の訃を聴く夜の更けを膝の小犬の背を撫でつつ
共に見しオーロラの薄き衣まとひ逝きしや桂子歌の先輩
十年の月日を何処さまよひし戻るすべなき病をにくむ
ふみ分けし宮古島の浜の紅紫色さだめなき世の「軍配昼顔」
手をつなぎ狭き石段のぼりつめ暑さに喘ぎしアンコール・ワット
駱駝の背たかきに跨りしがみつきサハラの風を共に吸ひし日
動くとも見えぬ氷河の先端は青く崩れき白炎の立つ

中島義雄　弔辞　・岡

虚を衝きて届く訃報を疑へば雨に重れる紫陽花暗し
消して書きまた書き泥み措く筆の弔辞ととのはず紫陽花の闇
在りの侭思ひのままを綴るとも黄泉路に届くことばを識らず
その肝を劇症に灼きてみまかると言へど明るし君の遺影は
己が死を呵呵と嗤ひて聴きゐむか女々しき弔辞の声を啜りぬ
「竹の雨をにつぽんの色」と詠みませる遺詠の雨が空を覆ひぬ
「ビール飲みて海峡越ゆる」君なればブランデー飲みて黄泉路越ゆらむ

永塚節子　コンコース　・銀

コンコーストランク引き摺り声高に行き交う人の多くなりたり
色白き膚にタトゥーの女の子日本の何を持ち帰るかは
とつくにの人に見せるもの誇るもの今の日本に残りいるらん
涼やかな浴衣に帯の組み合わせ足元見れば足袋を履きおり
若きらに疑問はあらず浴衣に足袋習わしゆるり崩れる日本
今の世は何でもありと言う友へ文化消えるとわれ物申す
ビル工事のネットをゆらす風の波都会の涼にひととき浸る

萩葉子　繊部　・銀

青繊部の四方鉢皿みてきし真夏日に薄茶点てたり繊部の平茶碗
鶴首の唐銅の花入床にありききょう一輪文月に咲く
3Bの鉛筆三本削りたり　心の旅を歩きはじめる
慌てない走らないと唱えつつブロッコリーひとつ買いに出かける
3Bの鉛筆一打買いきたり短くなるのが早いほど充実
ゆらっときた二十時二十四分確かにゆれた気のせいではない
そうでなくても蹲くから歩幅小さく雨の日歩く

白子れい　湯のかおり　・洛

万障を繰りて参加の短歌大会に馴染みの顔の少なくなれり
久にあい握手交わせば万感の迫りきたりて言葉とならず
ひさ久に浸る温泉の湯のかおりこころふっくら癒されており
大会の世話なしくれし人びとの御苦労謝しつつ帰りの車中
沙羅双樹の白き初花ひらきたり短きいのち輝く生命
脳検査機会のあらば受けてみん如何に幼にかえりていんか
人生に満点などはなきものと思いつつまた追い求めおり

ばばりょうこ　花毬　・鹿

六月の花毬を師に捧げます　友一　邑子のあじさいの忌
あじさいの花まりの中の小花たちの息づかい聴こゆ梅雨なかやすみ
六月のエントランスにあじさいがあじさいを呼び更に又もや
月出でぬ梅雨のはしりの雲の間(あい)ためらいがちにせつな消えたり
かなたよりひまわりたっぷりたずさえて他愛なき言葉放ちて去りぬ
花籠に愛をひしめかせ訪いたる佳人(ひと)も輪のなか四人(よったり)の夜
六月はまためぐり来てくさぐさの哀しきおもい愛(かな)しみに満つ

浜谷久子　福島大会　・地

うた仲間集う福島飯坂のあふれる緑のなかの再会
送迎のバスに弾ける笑い声身を乗り出して耳乗り出して
二割まで落ち込んだという震災後ホテルは傷を見せない温もり
団体のいかなる客もフォローするホテルスタッフが創る居心地
大会の班別歌会は月例の集いの近さに聴く表情と声
福島の名産つぎつぎ懇親会食べて止まらぬ箸のしあわせ
さよならはいつも寂しい来年はあっという間に来ると願って

浜本芙美　旅の苞　・夢

いのちある森羅万象の夢つむぎ生れたる朝の風の何いろ
旅の苞インデアンの魔除けとう草の実の首飾りわが胸のうえ
生命保険の勧誘ぴたりと来なくなり老いをしみじみかみしめており
土渇き草が芽を出すプランターそうだ正月の葉ぼたん植えよう
時くれば約束のごとたち上がりさ庭になよなよ花ほととぎす
若き日の友と語ればおのずから細胞青くよみがえりくる
心満たされ自ずとわきくる短歌ひとつ無垢の叫びを大切とせん

檜垣美保子　谷間　・昴

躍動のかたちととのえ若鮎の黄の口に鉄の串刺すおとこ
さかな屋に焼かれてならぶ鮎十尾おびれの飾りの塩のあわだち
貝の口すこしくひらきあしをもつ浅蜊が位置をかえてしずもる
三本の消えてしまいしペティナイフ因果あきらかならず水無月
値の高き夏の蓮根のひと節うすき輪切りを甘酢に放つ
雨だれの音の谷間にとぎれとぎれ「蛍の光」ピアノ弾く音
そののちを知らぬままにて人ひとりいのち終えしと酒席に聞けり

福田庸子　うるさき鳥　・今

この日頃移りきて啼ける画眉鳥のどこぞの国と似てけたたまし
余韻すら持たず啼きたる外来鳥に鴛おちけて寄りつかずなり
しっとりと青葉のかげに啼く声のしみわたりたる日日なつかしき
夕染むる空を映せる早苗田を見ればなじむ山のかげあり
早苗田の短き丈を進みくる白鷺水に染まらぬままを
身の動き徐徐にせばまりゆくものとショッピングカートに委ねたる午後
片脚の荷重かばひて一呼吸歩みくる人をゆつくりと待つ

藤川和子　W杯　・眉

つゆ濁る川面にうつり揺らぎゐる屋並によぎる南海トラフ
瀬戸内のつゆのまさやか振り向けば高きブロック塀わが家を囲ふ
青草の苑明るませ紋白蝶あまたひらめくゴウコンらしき
屋敷内半夏に現はれしカラスビシャク今日の紙面に毒草とあり
とにかくに住み古りにけりあと少し河口のあした微光を湛へよ
熱戦のワールドカップを老いふたり真夜の昂り生きを削りぬ
世界地図ひろげてたどる国境線毛細血管なづきにからむ

藤田美智子　ばばたも　・新

馬場町長の岡ひやうやく終はりたり原発事故より二千六百六十一日
全町避難後テレビに映りゐし顔の髭ばうばうと伸びてゐたりき
じくじくと馬場氏の胃の腑を侵ししは避難の町民を率ゐたる日日
主の帰りを待ちゐし黒き椅子映る町長の死を悼む画像に
町民の多くがマイクに語りたり「事故がらの無理がたたったんだべえ」
だれよりも馬場氏が思ったことだらう六十九歳で死ぬはずちやなかった
「ばばたも」と町長を愛称に呼んでゐき浪江町より避難の児らは

藤森巳行　女川　・銀

震災の復興半ばの女川港大型クレーン首振り働く
海軍の父が勤めてゐたといふ防備隊跡今更地なり
女川の海軍防備隊跡に立つ父はこの地で二年を過ごす
亡き父が勤めてゐたとふ女川の防備隊跡雑草覆ふ
防備隊の主計下士官我が父は砲弾撃たずに終戦迎へる
お袋に背負はれ見ただろ女川港我一歳の昭和十九年
知る人も少なくなりし防備隊跡地に立ちて父を思へり

船田清子　テッペン　カケタカ　・天

夜更けを一声にはかに天降り来る〝テッペン　カケタカ〟しじまを引きて
梅雨季はあぢさゐの藍　その色が人生の哀と愛を深くす
あぢさゐの紅年々に数を増し梅雨の哀れの褪せゆくばかり
夏至の日を待ちて咲けるやねむの花雨後の陽射しに紅あざやけく
西方の砂漠にまたも紛争か　無気味に燃ゆる夏至の夕空
なれが生の終りを飾らむと育みし沙羅なりつひにやさしく笑けり
汝が笑みが吐息と共にわが前に息づきてゐる雨音のなか

牧雄彦　京都・愛宕山　・大

どこまでも続く山道あへぎつつ登れば木の間ゆ細き日が差す
坂道に積もる枯れ葉を踏み登る遠き日のこと思ふ何ゆゑ
遠どほに清滝川のたぎつ音山道に夕べの木洩れ日が散る
ひたひたと足音のして若者がわれに会釈し追ひ越しゆけり
足音消えふたたび静けき山道に聞こゆるはかすか山の音のみ
頂きまで五十丁とふ標識を見つつやうやく二十丁目に着く
二十丁目ひと息つかむと腰おろし森永ミルクキャラメルを舐む

松浦禎子　ぬけられます　・羊

「寺島町奇譚」の展覧ありという東大過ぎて弥生画廊へ
滝田ゆう少年時代のキヨシ君の跡つけてゆく路地ひたひたと
滝田ゆう五歳の記憶に色どられし寺島町の面影の地図
密集する家々の前をはしりたる路面電車の昭和をしのぶ
自が背中大きく描きし絵の下に泥濘の落款跳ねる小さく
「ぬけられます」角を曲ってもぬけられますどこまで行ってもぬけられぬ路地
坊主頭の滝田ゆう享年五十九歳われ家を出でし平成二年

松永智子　さきぶれ　・嵐

野火とほくあかあか燃ゆるを怖れとし記憶にあたらし三月の闇
ゆゑよしのあらずいまにしかなしめば三月の闇野火のみえくる
燃ゆる野火近く見むとし田の畦の闇ひたすらに駈けしもとほし
あかあかと闇にひとすぢ燃ゆる野火春三月のさきぶれのいろ
わらべの日いまにあたらし野火燃ゆる闇を見たりきおそれ見たりき
とほき日の記憶あたらし三月の闇ふかくして野火あかくして
春浅き宵の闇に燃ゆる野火とほき日のままときめきさそふ

三浦好博　ひまはり　・銚

歳時記にきみがあつたよと告げつつも苑の芝生の捩花を刈る
速からずいづれか一人残さるる今宵の蛍は近寄りてくる
澱みたる運河の水をつき出でて蝙蝠傘の苦しみゐたり
ああ鳥居だらけのまちぞ「ゴミ捨てる者には罰が当たります」とぞ
話すことよくもあるなと言はれけり日毎の散歩の我らの声に
この丘にさへ弧を描く蒼の沖見ればしみじみ愛しき地球
一抱へのひまはりをゴッホの絵に似せて壺一杯に飾りたりけり

宮本靖彦　成都周遊　・凌

Tシャツににぎはふ機中公用の出張者見ず漢語にぎやか
高層のビル群囲む杜甫草堂小路に匂ふくちなしの花
祝日に来たるパンダ基地幾百の親子がかこむパンダの朝食
武侯祠に雨降りきたる孔明の智忠尊ぶ人心うれし
琅江の流れたうたう樂山の巨仏の和顔草衣をまとふ
三星堆の青銅仮面鼻高し古代のおごり今に持ちこし
半月の上に出でたる高層ビル暁に発つ成都の空へ

三好聖三　退散　・伊

らっきょうが上へ上へと浮きながら硝子の瓶のなかを艶めく
この道も俺の領土と言うようにのろりそろりと猫の歩めり
知の教祖などと呼ばれて哀れなり行くべきはただ無名の水際
わがうちの「危険分子」ならずとも「ほほゑみのみ」の世界を否む
頭からコートを被り濡れて行くジャコメッティの雨の風姿は
わたくしにそぐわぬ場所は退いてペットボトルのお茶を飲む　駅
啓蒙という言葉をやたら使うゆえやや距離を置くその男とは

御代田澄江　祈る背姿　・茨

銭の成る木を光の庭に戻しやる霜の来る頃また取り込まむ
遠景に小さく背の君の姿あり　祈る姿勢と見えて夢覚む
久々に夫の夢見ぬ何祈る吾もまた祈り心し暮らさむ
「光が眩しい」朝子の言ふ嵐止み寒雨吹き去り一転快晴
失せ物の出で来し朝を何よりの恩寵悩み消え一転の爽
木造の切妻平屋の小屋が建ちゆく見つつ心和めり
電動ウオーカー買ひたしと言へば付き合ふと娘の応じ来ぬその日待たるる

茂木斌　仏速離世　・埼

新人類も還暦を過ぎいまは早やジュニアがＡＩ支へています
電子辞書諸橋漢和を入れて出よ十万円なら文句なく瞬ふ
枕辺に夕べ浮かんでメモしたるくちやくちや文字の歌清書する
飾られし蓮華升麻の和紙の花その巧みさに顔を近づく
笠山へ山路に小さき供養塔仏速離世信女と刻む
なにゆゑに道を違へる若者か誰でもよかつた殺人またも
一切経山に魔女の瞳を堪能しわれは七十八歳狂山

もとむらしげと　阿呆　・そ

新聞を読まず未曾有すら読めぬ政治家のいて国荒みゆく
新聞を読まぬ国民が支持者とは巷を猿が歩くがよいか
国民を愚昧にみちびく指導者の阿呆な政治に怒りを覚ゆ
国会にデモする人ら多くしてふつふつと湧く怒りの共感
嘘をつきしらを切りつつ道徳を教科にせよとよくぞ言いたり
民の声吸い上げる気なく粛々と悪法を通す政治屋の群れ
怒りをば胸に滾らせ過ごしゆく老後の日々は苦しくてならず

久我田鶴子　浜通り　・羊

近づけば原発隠る　息あるを残したるまま封ぜられし地
放射能の風に乗るごと移れるを避難にあらずと知りしは何時か
七年を経てなほつづく瓦礫処理粉砕焼却貯蔵隔離
小学校裏を大きく囲ひこみせはしく動く重機の首は
防潮堤を走るダンプの行く先に復興祈念の公園がなる
視察団受け入れ被災地ガイドするたびに更新されゐむ　傷よ
帰還困難区域走行車中にもなほ鳴りやまぬものあるを知る

●『ユーカラ邂逅』　アイヌ文学と歌人小中英之の世界　天草季紅著

『遠き声　小中英之』の著者による渾身の新刊。
大きく三つの部から構成されている。
「Ⅰ」には、小中英之の短歌をアイヌとのかかわりの観点から読み直した文章を収めている。この中で、小野茂樹とのかかわり、「地中海」の企画「何をうたうか」に応えた小中の作品についても触れられている。
「Ⅱ」には、旅の途上で出会ったアイヌの歌人、小説家、詩人についての文章を収めている。（バチラー八重子・違星北斗・鳩沢佐美夫・佐々木昌雄）
「Ⅲ」には、小中英之の短歌に取材した、関東、甲信、東北、北海道の地名をめぐる紀行文を収めている。
新評論（二七〇〇円＋税）

●地中海叢書◇新刊・近刊案内●

・小林能子歌集『計算尺とゴジラ』（第915篇）　九曜書林
・船田敦弘歌集『平城鎖歌』（第916篇）　砂子屋書房
（三〇〇〇円＋税）

〈近刊〉

・川野知美歌集『ムーンロード』（第914篇）　ながらみ書房
・もとむらしげと歌集『オカリナを吹き鳴らして』（第917篇）　南日本新聞社開発センター
・小西美智子歌集『白樫春檢』（第918篇）　青磁社
・近内静子歌集『山鳩』（第919篇）　九曜書林
・大久保関子歌集『風をたずねて』（第920篇）　九曜書林

＊　＊　＊

・桃原邑子歌集『沖縄〈新装版〉』（第912篇）　六花書林
好評販売中。二〇〇〇円（税・送料は桃原良次氏負担）
本社にご注文ください。九曜書林を振込先にしています。

＊　＊　＊

ただいま出版準備中の歌集も何冊かあります。歌集を出版する際には、叢書番号の登録をお願いします。
歌集の出版を考えながら、どのようにしていいか分からない方は、お気軽に編集部にご相談ください。出版までの段取りを知りたい方もご連絡ください。プリントをお送りします。
費用をできるだけ抑えたい、自分で装丁までしてみたい、というような方には、九曜書林でという方法もあります。
遠慮無くご相談ください。
【編集部】

今月の二人

野良着のままに

赤堀　敦子

「おーい、まだか」通院の夫が急かすゆゑ野良よりの汗拭ふ間もなし

二時間半馳せ来て受けし診療は曖昧模糊と十分で終る

満員のエレベーターに背を曲げてわれは小人のごとくゐるなり

咳き込めば透かさず夫の背を撫でぬ誤嚥といふを常に恐れて

あと少しと日暮れの畑を打ちをれば杖つきて夫が呼びにくるなり

汗に濡れし野良着のままに肉じやがを煮てをりひたすら待つ者のため

朝々を来て受粉せし南京(なんきん)が葉陰に太る二つ三つ四つ

嬰児を労(いたは)るごとく敷き藁を厚手に敷きて南瓜座らす

草取りの腰伸(の)して畑に息づけば黄砂に曇る那岐山の峰

昨日(きのう)畑の蚋(ぶよ)に刺されし唇に紅つけて福祉の会合にゆく

腰曲げて採りゆく胡瓜は曲がりゐて空に曲がりし昼の月あり

曲がりたる胡瓜なれども爽やかに緑したたる酢の物となる

よき友に誘はれて来し薔薇園の明日咲く蕾に水無月の光(かげ)

師あり友ありて

中国山脈一の高峰、那岐山の麓で、ぽつりぽつりと歌を作り始めて四十年にもなろうか。「生涯学習」の指導者であった中島義雄先生に乞い、「地中海」に入れていただいて今年で二十年になる。

数年前、まだ病状の軽かった夫の手引きをして、法然上人生誕の地、誕生寺で「二十五菩薩練り供養」に参加させていただいたことがある。

これは、無形文化財として鎌倉時代から続く宗教行事で、伝統の衣裳に身を包み、金箔の菩薩面と光背を着け、古代楽器を手にした二十五体の菩薩が、前後に約百名の僧と稚児衆を従え、越天楽の奏楽に合わせて歩みを進め、約六百メートルを行道し、法然上人両親の御霊を極楽浄土にお迎えするという荘厳な行事である。

菩薩衣裳の夫（面を被っていて視界が暗い）の手を曳いて、無想に近い思いで行列に従った時、なにか短歌に対するひとつの境地を会得したような気がした。

齢(よわい)すでに八十を越えたが、この命の続く限り、よき師よき友のあたたかさを頼りに不束な歩みを続けて行きたいと、今は願うのみである。

今月の二人

庭

定金　崇恵

父母の顕ちくる春の朝庭に深く息吸いひと日を始める
母残す松の根方に黄の水仙四十年を咲き継ぐ早春の彩
ひとり居を励ますごとく父の植えし春蘭今年も岩かげに香る
あこがれて、あこがれて待ち堅香子の紅紫に庭は明るむ
庭池に白き妖精か水芭蕉水面に映る今年は三株
庭池は黄の菖蒲に占められてひそやかに咲く杜若二本
うす青き勿忘草の開く朝急ぎ取り出すアルバムに友
里桜浮く蹲踞にひよどり二羽花見酒としゃれ喉うるおす
おしゃべりの弾む縁側女三人主役は友の手造り草餅
晩春の陽の傾くに草引けば応援歌なる四十雀の声
雨ごとに伸びる庭草気になりて心ならずも人に委ねる
ぎぼしの葉に小さき点滅見つけたり恋蛍かも忍び逢う宵
春雷の光と音の激しきにも泰然と立つ庭木に安らぐ

生活に潤いが…

短歌を詠むことは、何げない日々の暮しの中で私の心を少し膨らませてくれます。まわりの自然、人々、そして生活のいろいろな場面で見逃してしまいそうな一瞬が短歌につながると嬉しいものです。

短歌との出会いは町の短歌会に参加した時でした。ちょうど定年を迎えほっとするとともに心寂しさも感じていました。短歌については初心者の私を、仲間の設楽さんより「詩織の会」の小山宜子先生をご紹介いただき、地中海に入会し早や十年がたちました。小山先生には添削などご苦労をおかけし、感謝でいっぱいです。その後、小山先生が体調を崩され、編集の久我田鶴子様のお世話になり現在に至っております。

そんな時「今月の二人」へのお誘いがあって正直驚きました。一つのテーマで十三首詠むには自信がありませんでしたが、それでも我が家の春の庭をとりあげ頑張ってみました。私にとって庭には亡き父母、友、好きな花や小鳥たちが棲んでいます。田舎家の小さな庭ですが、四季折々の風情に癒されています。短歌を詠もうとの思いが心を潤し、生活に彩りを添えてくれる今日この頃です。

◆今月の二人・赤堀敦子作品評◆

腰伸して畑に息づけば

赤堀さんは、岡山県の奈義町在住。中国山地の端にある那岐山の麓で、夫を支えながら野良仕事に勤しんでいる。

・**「おーい、まだか」通院の夫が急かすゆゑ野良よりの汗拭ふ間もなし**

・**あと少しと日暮れの畑を打ちをれば杖つきて夫が呼びにくるなり**

・**汗に濡れし野良着のままに肉じやがを煮てをりひたすら待つ者のため**

これらの作品を読むと、赤堀さんが夫思いの働き者であることがよく解る。杖をついて畑に呼びに来る夫の姿からは、夫婦仲の良さも窺え、なにか微笑ましくもなる。

・**嬰児を労るごとく敷き藁を厚手に敷きて南瓜座らす**

畑の作物に対しても懇ろに世話をする人であるようだ。嬰児をいたわるように敷き藁を敷いて、その上に南瓜を「座ら」せる、と言う。前の作品で南瓜に「なんきん」と読みがなを付けているので、ここでも「なんきん」と読ませるのだろう。愛おしさが増すようである。

・**草取りの腰伸して畑に息づけば黄砂に霞る那岐山の峰**

草を取るのに曲げていた腰を伸ばして畑でほっと息をついている姿が具体的に見えてくる上の句。下の句には、風土の景が季節感をともなって固有名詞で示されている。

・**よき友に誘はれて来し薔薇園の明日咲く蕾に水無月の光**

下の句「明日咲く蕾に水無月の光」が決まっている。友に誘われて来たことの嬉しさも伝わってくる。

◆今月の二人・定金崇恵作品評◆

朝庭に深く息吸い

評者・久我田鶴子

定金さんは、岡山県の鴨方町在住。倉敷より広島寄りの瀬戸内側の町で、庭の草花を楽しまれている。

・**父母の顕ちくる春の朝庭に深く息吸いひと日を始める**

春の庭から始まる一日。その庭は父母の思い出とともにあるのだろう。庭に立てば、父母に守られている気持ちにもなるのかもしれない。

・**ひとり居を励ますごとく父の植えし春蘭今年も岩かげに香る**

今年も春蘭が咲いている。それは父が植えたものだ。そう思うと、花の香までが「ひとり居」を励ましてくれているようだと、寂しさを殊更には言わない。

・**庭池は黄の菖蒲に占められてひそやかに咲く杜若二本**

「黄」は「きい」と読ませるのだろう。黄の菖蒲の中に杜若は二本と言っても、紫を凛と際立たせていたのでは。「ひそやかに」には、杜若の花に対する作者の心寄せが感じられる。

・**里桜浮く蹲踞にひよどり二羽花見酒としゃれ喉うるおす**

桜を浮かべている蹲踞に、水を飲みに来たヒヨドリが二羽。それを、花見酒と洒落こんでいるねと見ている作者。ゆったりとした春の時間が流れ、くつろいだ雰囲気が漂う。

・**おしゃべりの弾む縁側女三人主役は友の手造り草餅**

女ばかり三人の、縁側でのおしゃべり。弾まないわけはない。しかも、手造りの草餅まで持参とあっては。賑やかに草餅をいただきながら、話の中身もおのずと「草餅」に。女三人、誰が主役になってもいいようなものだが、ここではやっぱり「主役は草餅」でしょ、と笑いが聞こえてきそうだ。

私と短歌との出会い 193

内田泰子

私と短歌の出会いは突然であった。洛東高校に於いてPTAの庶務をしていた時に、広報の行事の一環として、山村金三郎先生に『万葉集』の講義をしていただけないかとお願いにあがった。先生はその場で「僕に短歌を習え」とおっしゃった。そこで早速PTAに講演と短歌講習を呼び掛けたところ、四十名余りの応募があり、関心の高さに驚いたのであった。それぞれ子どもの手が離れ、何かしてみたいという気持ちを持っている人が多かったのかもしれない。講演会場の高校の図書室は一杯になった。私は女学校卒業後久しぶりに受ける授業だったのでわくわくしていた。

先生の歌のご指導が始まり、「先ずよく見る、そして感じたことを言葉にして表現する。」と一から手ほどきしていただいた。先生には「一日に一首作れ」と言われたが、それすら難しく、雑事に追われながらの日々であった。

やがて子どもの卒業など様々な事情でやめていく人がでた中で、十名ほどが残った。月一回、半紙に自作の歌を書いて持ち寄り、みんなの歌を張り出して先生に添削していただく。こうして昭和五十年に「地中海」に入れていただき、同年九月の誌上に二首を載せていただいた。自分の歌が活字になった時の感激は今も忘れられない。

先生には休日返上で吟行に連れていっていただいた。何より心に残っているのは滋賀里の小高い山の中程にある「崇福寺跡」だった。道中の杉の木立から漏れ来る陽を浴び、淡い紅色の笹百合が揺れていた。道を登りきった所にその遺跡はあった。点々と礎石が等間隔に並び、人気のない遺跡の中を一歩ずつ歩きながら、ここにあったであろう堂や伽藍に思いを馳せていた。先生のよく通るお声が隅々まで行き渡り、みんな一生懸命に耳を傾け聞いていた。

七世紀に天智天皇の命により建立され、隆盛を誇ったが、度重なる火災に見舞われ、室町時代には廃寺となったと学ばせていただいた。遥かにのぞむ美しい琵琶湖から吹き上がって来る初夏の風が肌に心地よかった。「崇福寺旧跡」のどっしりとした碑を背に山を下った。発掘の際に出土した、京都国立博物館に展示されている瑠璃の舎利容器を見る度にその時のことが思い出される。

最も多く連れて行っていただいたのは奈良であった。何より興福寺の旧国宝館で初めて学習したことは、脱活乾漆という技法についてである。木と粘土で形を作り、上から麻と漆を張り重ね、後に粘土を掻き出すものである。十大弟子、八部衆、とりわけ阿修羅像の繊細な表情に成年にはない、ういういしさを感じた。千年余りを経てなおその赤は保たれ、秘めたる力をその面に見る思いであった。山田寺仏頭には白鳳時代の凛としたたたずまいに心が引き締まった。本当にたくさんの古刹を案内していただき、たくさんの貴重なお話を伺った。当時は分からなかったが、本当に高度で贅沢な指導を受けていたものだと思う。

最後に三十三間堂を訪れた時、地中海の全国大会の構想の一部をお聞きした。その後「ほな」と手を挙げられた先生とお別れした。あの日が最期になるとは思いも寄らなかった。先生の訃報を聞いた時には足を掬われる思いであった。以来、十五年余り、今なお五里霧中で歌にのぞむ日々である。